

琉球大学学術リポジトリ

第2部自己点検・評価の結果

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学教育センター 公開日: 2018-08-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/42150

第1章 理念・目的・教育課程

本章では、本学における共通教育等を、教育理念・目的、共通教育等における各授業科目区分の教育目的、授業案内・シラバス、生涯学習社会への対応、共通教育等と専門教育との連携、選抜試験と教育理念・目的との関連性、の6項目について検討した。

以下、この6項目について、現状・問題点・改善案について指摘する。

1. 教育理念・目的

1) 本学の理念及び教育活動によって養成が期待されている人材像

本学は、本学の基本理念「真・公・和」^(注1)に基づいて、「(ア)世界に通用する真理探求の府、特に地域の特性を活かした国際的学術研究交流の拠点としての大学、(イ)地域に根差し地域の要請に応える開かれた大学、(ウ)自由平等と寛容平和の精神に基づいた国際秩序の構築に貢献し、人類の福祉・文化遺産の継承発展、並びに人類と自然との調和・共存を図る大学を目指」して改善・改革に努めている（琉球大学大学改革検討委員会『新しい琉球大学を目指して－琉球大学大学改革検討委員会答申－』1993年10月、16頁）。

その中でも、大学の基本的な社会的役割の1つである教育活動を通して、「本学は、(ア)自らの文化を学び、語学能力を培い、異文化を理解し、国際協調・平和愛好の精神をもった国際的教養人、(イ)科学技術のシステムを理解し、その創造的発展を担える人材、(ウ)激動の時代にあって、総合的判断力・先見性・創造性をもつ社会の指導者・実践者となる人材、(エ)地域及び地球課題の解決に積極的に取り組む人材」を育成することを目指している（琉球大学大学改革検討委員会『新しい琉球大学を目指して－琉球大学大学改革検討委員会答申－』1993年10月、16頁）。

2) 大学全体としての共通教育等の理念・目的

以上の教育理念や期待されている人材像に沿って本学の各学部では教育活動が展開されている。

各学部・学科等別に共通教育等別履修基準を示したのが次頁の表Ⅱ-1-1である。

教育活動は、基本的には専門教育と共通教育等に分類できるが、自然科学系学部・専修（理学部、工学部、農学部、教育学部の理科教育・技術教育専修）において専門基礎教育が追加されている。これは、理系学生が理科教養を身に付けるための基礎的科目群から成り立っており、高校から大学の理科系をつなぐ教育を行っている。

この度点検・評価しているのは、大学教育センターが責任を持って実施している共通教育等及び専門基礎教育である。本学では、これらを共通教育等と呼んでいる^(注2)。

表Ⅱ-1-1 各学部学科等別共通教育等別履修基準

学部	学科・課程等 コース	共通教育								専門基礎教育	合計		
		教養領域				総合領域		基幹領域					
		健康運動	人文	社会	自然	総合		琉大特色	情報関係	外国語		専門基礎	
一般	高学年次												
法文学部	総合社会システム学科 昼間主コース	2単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上					12単位以上		40単位以上	
			← 人文、～情報関係から26単位以上 →										
	夜間主コース	2単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上					12単位以上		40単位以上	
			← 人文、～情報関係から26単位以上 →										
	人間科学科(昼間主)	2単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上					12単位以上		40単位以上	
			← 人文、～情報関係から26単位以上 →										
国際言語文化学科(昼間主)	昼間主コース	2単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上		2単位以上		2単位以上	12単位以上		40単位以上	
		← 人文、～情報関係から26単位以上 →											
	夜間主コース	2単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上				2単位以上	12単位以上		40単位以上	
		← 人文、～情報関係から26単位以上 →											
教育学部	学校教育 教員養成 課程	国語教育専修	2単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上			2単位以上	8単位以上		28単位
		社会科教育専修	2単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上			2単位以上	8単位以上		28単位
		数学教育専修	2単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上			2単位以上	8単位以上		32単位
		理科教育専修	2単位以上	4単位以上	4単位以上	2単位以上	4単位以上			2単位以上	8単位以上	2単位以上	28単位
		音楽教育専修	2単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上			2単位以上	8単位以上		28単位
		美術教育専修	2単位以上	2単位以上	2単位以上	2単位以上				2単位以上	8単位以上		28単位
		保健体育専修	2単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上			2単位以上	8単位以上		28単位
		技術教育専修	2単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上			2単位以上	8単位以上	8単位以上	36単位
		家政教育専修	2単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上			2単位以上	8単位以上		28単位
		英語教育専修	2単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上			2単位以上	8単位以上		28単位
		教育学専修	2単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上			2単位以上	8単位以上		28単位
		学校心理学専修	2単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上			2単位以上	8単位以上		28単位
		児童教育専修	2単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上			2単位以上	8単位以上		28単位
		障害児教育専修	2単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上			2単位以上	8単位以上		28単位

⇒ 次頁に続く

	日本語教育コース	2単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上			2単位以上	8単位以上		28単位
	情報教育コース	2単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上	2単位以上			2単位以上	8単位以上	4単位以上	30単位
	生涯健康教育コース	2単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上			2単位以上	8単位以上		28単位
	鳥嶼文化教育コース	2単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上			2単位以上	8単位以上		28単位
	教育カウンセリングコ	2単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上			2単位以上	8単位以上		28単位
	自然環境教育コース	2単位以上	4単位以上	4単位以上	2単位以上	4単位以上			2単位以上	8単位以上	2単位以上	28単位
理学部	数理科学科	2単位以上	4単位以上 ← 上記含めて18単位以上	4単位以上	2単位以上					8単位以上	12単位以上	40単位以上
	物質地球科学科（物理系）	2単位以上	4単位以上 ← 上記含めて18単位以上	4単位以上						12単位以上	9単位以上	41単位以上
	物質地球科学科（地学系）	2単位以上	4単位以上 ← 上記含めて18単位以上	4単位以上						12単位以上	9単位以上	41単位以上
	海洋自然科学科（化学系）	2単位以上	4単位以上 ← 上記含めて18単位以上	4単位以上						12単位以上	14単位以上	46単位以上
	海洋自然科学科（生物系）	2単位以上	4単位以上 ← 上記含めて18単位以上	4単位以上						12単位以上	14単位以上	46単位以上
医学部	医学科	2単位以上	4単位以上	4単位以上		2単位以上	2単位以上		2単位以上	14単位以上	21単位以上	53単位以上
	保健学科	2単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上		2単位以上		2単位以上	8単位以上		28単位以上
工学部	機械システム工学科 昼間主コース	2単位以上	2単位以上	2単位以上		4単位以上			2単位以上	12単位以上	12単位以上	40単位以上
	夜間主コース	2単位以上	2単位以上	2単位以上		4単位以上			2単位以上	8単位以上	12単位以上	40単位以上
	環境建設工学科	2単位以上	2単位以上	2単位以上		2単位以上			2単位以上	12単位以上	12単位以上	40単位以上
	電気電子工学科 昼間主コース	2単位以上	2単位以上	2単位以上		2単位以上			2単位以上	12単位以上	12単位以上	40単位以上
	夜間主コース	2単位以上	2単位以上	2単位以上		2単位以上			2単位以上	8単位以上	10単位以上	40単位以上
	情報工学科	2単位以上	2単位以上	2単位以上		2単位以上			2単位以上	12単位以上	8単位以上	40単位以上
農学部	生物生産学科	3単位以上	4単位以上	4単位以上					2単位以上	12単位以上	10単位以上	40単位以上
	生産環境学科	3単位以上	4単位以上	4単位以上					2単位以上	12単位以上	13単位以上	40単位以上
	生物資源科学科	3単位以上	4単位以上	4単位以上					2単位以上	12単位以上	12単位以上	40単位以上

では、共通教育等の理念・目的は何であろうか。平成5年度以降の教養部改革の中で文章化されたものは2種類確認された。

1つは、平成7年に、琉球大学教養教育の目標として、琉球大学教育改善特別委員会で確認されたもので、以下の通りである。

「幅広く深い教養を培い、自主的で批判力に満ちた創造精神を基礎とする総合的判断力を育成し、もって豊かな人間性を涵養すること」

もう1つは、平成10年に本学の教養教育に対して文部省から視学委員が視察に訪れたときに作成した説明資料中にあるもので、以下の通りである。

「幅広く深い教養、総合的な判断力、豊かな人間性を涵養し、地域に根差した个性的な大学として平和を愛する心、地域の文化を理解し得る能力及び異文化間コミュニケーション能力の養成を理念・目的としている」（『琉球大学教養教育の状況等に関する実地視察調査表』平成10年5月、66頁）

「幅広く深い教養」「総合的な判断力」「豊かな人間性の涵養」は、どちらの文章にも共通して見受けられる。後者の文章は、共通教育等の理念・目的が、本学の理念・目的と整合的であることを確認する文章として見ることができる。

3) 各学部の教育理念における「共通教育等」の意味

なお、本学各学部の教育理念及びその中での「教養教育」のしめる内容については以下に示す通りである（『琉球大学教養教育の状況等に関する実地視察調査表』平成10年5月、66～67頁）。

法文学部 現代社会の国際化、情報化、高度化等、諸々の変化に対応していくために、広範な知識・教養と社会生活上の基本的な技能を身につけさせ、論理的な考察力、的確かつ総合的な判断力、豊かな創造性、及び複眼的・多角的視点をもたせることを共通教育等の理念・目的とする。

教育学部 教育学部は幅広い教養と専門的知識を身につけ、学校教育のみならず地域における教育、いわば生涯教育に係わる専門家を養成することにある。複雑な社会状況がもたらす子どもの諸問題に対し、その解決能力、指導力量が求められる。そのために教養教育は基礎的な課程である。教師として高度な知識とその探求は、共通教育等の目的である時代の変化に即応し、積極的、かつ主体的人間であることを前提とする。

理学部 理学部では、教養教育改革の以前から、既に旧教養部と理学部が連携を保ちながら4年一貫教育を意識した年次指導教官制度やカリキュラム編成を実施し、更に教養部と理学部の教員が、一般教育と専門教育を担当できる相互乗入れ方式をとってきており、学部教育の枠にとどまらず、一般教育に積極的に参加してきた。そのような

経験から、今回の教養教育改革は、理学部が推進してきた教育の在り方・理念が取り入れられた。本学部においては、学校教育法にうたわれている「大学は学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的・道徳的及び応用的能力を展開させること」の意味を確認し、4年一貫教育による学部教育の新しいカリキュラムの実施のため自然科学の各専門分野を中心とした教育研究について専門の新カリキュラムを展開し、新しい理念に基づいて開設された共通教育等科目等を履修することによって、専門と教養の調和した人間を形成し、その成果を社会へ還元できる人材を養成する。

医学部 医学と保健学に関する専門の学術を修得し、医学、保健学の進歩に柔軟に対応し得る研究者、医師、保健医療技術者を育成することを目的としている。

また、数多くの島嶼で構成されている沖縄県の環境を踏まえ、地域の保健・医療の充実に努めるとともに、「南に開かれた国際性豊かな医学部」として東南アジアを中心とした近隣諸国の保健・医療の貢献に努める。

従って、「教養教育」においても、これらの理念・目的に沿い、21世紀に向けて豊かな人間性と深い教養を持ち、厳しい社会の変化に対応し得る個性的、創造的な医師、保健医療技術者養成のための教育を行う。

工学部 共通教育等科目は工学教育において重要な科目と位置付け、専門教育と有機的に関連付けて4年間（1年次～4年次）を通じて一貫教育を行う。一方専門教育も1年次から履修させることにより、共通教育等の必要性（重要性）を認識させ教育効果の向上をはかる。

農学部 農学部は、琉球大学の教育理念と目的を踏まえて、「沖縄県の置かれている亜熱帯地域という地理的条件を踏まえながら、熱帯地域、特に東南アジアを視野に入れ、バイオテクノロジーを含めた先端科学技術を取り入れた社会の要請に対応し得る人材の育成を目指し、衣・食・住に関する生物資源の生産、開発、利用及び保全にまたがる諸分野の教育研究を効果的に推進する」を目的とした学部づくりを進めている。

本学部における人材養成及び応用展開能力の目標を達成するのに広範囲および充実した基礎学力が要求され、これらの点の教育には共通教育等の重要性を強く認識している。

4) 問題点・改善案

本学の理念・目的と共通教育等の理念・目的は、整合性が取れているようである。それは、平成3年度以降の大学改革に沿って、教養部廃止に伴う今後の本学における教養教育のあり方に関する真摯な協議を通して検討されてきたことが最大の要因である。

教養教育には、「幅広く深い教養」「総合的な判断力」「豊かな人間性の涵養」という高邁な理念・目的があり、このことを教官は再認識し、教養教育を通して学生が幅広い知識を修得し人間性が涵養できるよう目指してほしい。

注1) 本理念は、平成3年6月に設置された「琉球大学大学改革検討委員会」において

検討・制定され、平成5年5月に学長へ答申され、評議会で承認されたものである。

「真」は真理の探究、「公」は地域社会、ひいては国際社会への貢献、「和」は平和を目指す人間関係の確立・人類と自然界との調和共存、の意である。

注2) 旧来の一般教育科目に相当する。

2. 共通教育等における各授業科目区分

現行の共通教育等は、共通教育等と専門基礎教育に2分され、さらに、共通教育等は、教養領域、総合領域、基幹領域に3分されている。

なお、平成6年度にスタートした現行の共通教育等の授業科目区分に到った経緯については、本報告書第I部第1章で詳細に記述されているのでそちらを参照していただきたい。

1) 現状

以下では、現行の共通教育等における各授業科目区分の教育目的について記述する（琉球大学教養部編『教養部の教育と研究 自己点検評価報告書』1996年3月、22～24頁）。

(1) 共通教育等

教養領域 「教養領域」の科目群は、問題解決に必要な固有の知識や方法を学ぶための科目であり、人文系科目、自然系科目、社会系科目および健康運動系科目から構成されている。人文、社会、自然諸科学の内容や特有の課題に精通し、それらを現代的状況に応用できる能力を養うことを通して、個々人の視野を広げるとともに、多面的に問題をとらえる態度や資質を養成することを目指している。

本領域の特徴は、現代的な状況や問題、個々の学生の興味や関心・能力に配慮して、テーマや内容を、精選・再編しているところにある。このことは伝統的な個別科学の名称が、個々の授業の科目名として採用されていないことに現れており（例えば、「生き方の探求」（倫理学）や「数の文化」（数学）など）、大学の教養教育が個別の学問分野の基礎を網羅的に教えるものではないことを明瞭に意志表示したものである。

また、「健康運動系科目」は、従来の「保健体育講義」と「体育実技」の2つの科目にかわって、理論と実技を有機的に結合した授業科目や、「空手」、「琉球舞踊」といった沖縄独自の実技科目を含んだ学生の興味・関心に応じた多様な実技科目から構成されている。さらに、学生の運動能力の程度に応じた特別クラスも編成されている。

総合領域 「総合領域」の科目群は、重層的で複雑に絡み合った現代的な問題を解決するに当たって、多角的に分析するための能力や総合的に判断するための能力を培うことを目的としており、「総合科目」と「琉大特色科目」に2分される。

本領域は、教養領域と同じように、授業科目のテーマや内容に工夫がなされている。即ち、一方では「女性学」のように人文・社会・自然の3分野を横断する現代的で重層的なテーマが設定されており、他方では、隣接領域にある複数の教官が、それぞれのアプロー

ちでもって、共同で担当するテーマを扱う授業科目（例えば「遺伝子の話」など）が設定されている。

なお、平成8年度からは、総合科目は、3・4年次で履修するよう定められている高学年次用総合科目と一般総合科目に2分された。その結果、一般総合科目は高学年次用総合科目以外の総合科目を指すことになった。

高学年次用総合科目は、総合科目の中でも特に高学年次学生の知的・精神的発達に応じた内容を持ち、全学の複数教員の担当によって提供される科目である。平成8年度は「現代社会の課題－21世紀への挑戦－」、「科学者とは何か－科学者の責任を考える－」および「倫理総合討論」の3科目が開設され、現在は3科目増えて6科目が提供されている。

また、「琉大特色科目」は、総合科目と同じような考え方やアプローチでもって、本学の開学理念から派生する4つの教育理念（自由と平等・寛容と平和を旨とする教育、地域に根ざした教育、国際化に対応する教育及び熱帯、亜熱帯、海洋、島嶼を考える教育）に焦点を当てて、授業内容を編成した科目である。すなわち、この科目は、共通教育等において本学独自の理念を具現化した科目とも言え、「平和論」、「台風－自然と風土」、「アジアと沖縄」等の個性ある科目から構成されている。

基幹領域 基幹領域は「情報関係科目」と「外国語科目」から構成されている。

本領域は、学問教育研究の基礎や土台をなす知識や技能を養うことを目的としている。したがって、この領域科目は、学部・学科・課程や専攻の如何を問わず、すべての学生に、その履修と習熟が期待されている。

「情報関係科目」は、あらゆる学問の基礎となる情報処理能力と日本語表現能力を訓練するための科目であり、「情報科学演習」と「日本語表現法入門」の2つの科目から構成されている。

「外国語科目」は、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、ラテン語、中国語、朝鮮語及び、インドネシア語から構成されている。ロシア語、ラテン語、朝鮮語及びインドネシア語以外の科目では、基礎的な授業科目を終了した後に、学生の多様なニーズや学部・学科の要請を配慮し、さらなる表現力の養成を主にするクラス、ことばの背景である風物や生活・社会事情の理解を深めるクラス、専門教育とのつながりを持たせたクラス等の発展的な授業科目が開設されている。

(2) 専門基礎科目

「専門基礎科目」は理科系の専門教育を履修するための基礎になる科目群であり、「先修科目」と「転換科目」に2分されている。

「先修科目」は、理科系の専門科目を履修する前の、なるべく早い時期に学ぶべき科目である。例えば、「微分積分学Ⅰ・Ⅱ」「物理学Ⅰ、Ⅱ」、「同実験」などの科目である。

「転換科目」は新カリキュラムで新たに設けられた科目であり、中等教育から高等教育への過渡期の教育（橋渡し）を目的とする科目である。高等学校での科目の選択制や、大学入試での選択科目の選び方によって、大学入学時には履修していないが、学生にとっては必要な科目の補完を目的としている。例えば、高校で物理を履修していない学生のための「数学入門Ⅰ・Ⅱ」「物理学入門Ⅰ・Ⅱ」などの科目である。

2) 問題点・改善方向

各授業科目区分の理念・目的は、十分検討されたものとして評価されるものではないかと思われる。

さらに、本学の理念・目的に沿った共通教育等を実現するため、授業科目の提供に対して4点ほど問題点を指摘しておきたい。

1つは、平成9年度から高学年次総合科目の必修化を目指していたにもかかわらず、高学年次において卒業研究等で過密な学習活動をしている学生の状況や、目的に沿った高学年次総合科目の開発が難しい、等の理由からいままって実現していない状況をどのように改善していくのかという点である。今後は、高学年次総合科目の意義について検討し、どのように位置づけていくか再検討が必要である。

2番目に、「日本語表現法入門」に関しては、当初の目的（基礎的な日本語の音声、文法、語彙表記、文体等を学習するとともに、レポートの作成や発表等を演習する）と、実際の授業内容が異なっているのではないかと指摘があり、早急に検討していくべきである。

3番目に、多くの科目について、その理念・目的を達成するためには、担当人員が足りないとか、担当教員がいないなどが指摘されており、全学教育委員会で早急に検討することが求められる。

最後に、近年、高校のカリキュラムの多様化や、選抜試験制度の柔軟化に伴って、大学教育を受けるに必要な基礎科目を取得しないで大学に入学してくる学生の問題が指摘されている。一応は転換科目等でこのような学生に対応しようとしているが十分に対応しきれていない。選抜試験のあり方や補修教育などのあり方などのついて再検討が必要である。

3. 授業案内・シラバス

1) 現状

本学の学生は、『学生便覧』と『時間割配当表』と『共通教育等科目授業計画』に基づいて共通教育等科目を選択し、登録を行っている。

特に、『共通教育等科目授業計画書』は、学生の科目選択と登録をスムーズに行うために、『学生便覧』に掲載された「授業内容」を拡大し解説したもので、平成7年度より、毎年4月に作成・配布している^(注1)。これは「登録前の学生に、授業科目選択のための情報を与える」という講義案内^(注2)の目的と、「授業科目を登録した学生に、授業案内の概要を授業時間の具体的流れにそって提示する」というシラバス^(注3)の目的の両方を兼ね備えた内容となっている。

その内容は、科目名、担当教員名、開設学期、教科書、参考文献、授業の主旨、成績評価の方法、授業予定(15回分)、等となっている。

平成12年度前期の開設科目154科目に対して119科目(77.3%)が授業計画書を提出している。科目区分ごとに見ると、100%提供しているものから、琉大特色科目のように57%のものまでである(表Ⅱ-1-2)。

表Ⅱ-1-2 共通教育等科目授業計画書（シラバス）の提出状況（平成12年度前期）

	開設科目数	シラバス提出数	提出率
健康運動系科目	21 (3)	14 (2)	66.7% (66.7%)
人文系科目	23 (3)	17 ()	73.9% (0.0%)
社会系科目	14 (3)	11 (2)	78.6% (66.7%)
自然系科目	18 (3)	18 (1)	100.0% (33.3%)
総合科目	12 (2)	8 (1)	66.7% (50.0%)
琉大特色科目	14 (2)	8 ()	57.1% (0.0%)
情報関係科目	2 (2)	2 ()	100.0% (0.0%)
外国語科目	32 (9)	25 ()	78.1% (0.0%)
専門基礎科目	18 (6)	16 (3)	88.9% (50.0%)
計	154 (33)	119 (9)	77.3% (27.3%)

注) ()は夜間主

2) 学生からの問題点の指摘

このたび6月に実施した学生対象のアンケート調査のなかで、シラバスについての問題点を指摘してもらった。その内容を、①利用方法がわからない、②情報提示方法の工夫、③全ての授業が掲載されていない、④内容と実際の授業が異なっている、の4点にまとめて以下に提示しておきたい。

①利用方法がわからない

- ・「利用方法がわからない」「いまいち使い方がわからん」

②情報提示方法の工夫

- ・「内容不足」「詳しくかいていない」
- ・「成績評価についてのことをもっとくわしくかいてほしい」
- ・「授業の内容とか書いてほしい、総合英語などはそれぞれの授業の特長などがかいてなかった」
- ・「授業のりがい略はわかりやすいがもう少しくわしく」→シラバスの配布
- ・「教官の写真を載せて欲しい」
- ・「内容が多すぎる。もっと簡潔に」
- ・「あまり授業内容やおもしろさが伝わってこない、はっきりいって紙の無駄では」
- ・「最初の1カ月だけは使用しているが……」
- ・「もらう時期が遅すぎた」
- ・「内容が理解しづらい」

③全ての授業が掲載されていない

- ・「役に立っているがシラバスにのっていない授業あり、選ぶときに困る。すべての授業のものをのせないと意味ない」
- ・「夜間主の授業のことがあまりのっていない」
- ・「美術系の課目についてのシラバスがないのはおかしい。是非作って頂きたい」

- ・「取らないといけない授業のシラバスが無いことが多い。内容を知らないまま登録して、後悔することが多い」
- ・「ほとんどの学生が利用していないと思う。利用したいと思ったとき、目的の講義のシラバスがないことが多い」
- ・「のっているモノとのっていないものがある、授業を選ぶ時その対比によってえらびたいのですべてのせてほしい」

④内容と実際の授業が異なっている

- ・「シラバスの内容と授業内容が異なっていることが多い」
- ・「全部の授業がのっていない、のっている事と実際の授業が違う事がある」
- ・「授業内容は全く違うものになっている」
- ・「実際にはその通りなっていないものが多い」
- ・「計画通り行く先生が少ない」
- ・「うそを書いている」
- ・「のっていない人もいるし、シラバスと実際では違うのが多い」
- ・「シラバスどおりにすすまない」
- ・「シラバスでは魅力あることを書いてあるが、実際の授業はそうでない先生が多い」

3) 改善点

以上の問題点の指摘に対応するために、以下のような改善を促したい。

1つは、授業案内やシラバスの意味や利用方法の説明を本学入学時のオリエンテーションにおいて十分に行うことが必要である。

2番目は、提供されている授業科目については全て授業案内に掲載することが必要である。特に、夜間主コース提供科目については早急の対応が求められる。

3番目は、授業案内は登録時に集中的に利用し、その後は受講科目についてのみ利用するという性格上、現行の印刷物では紙資源の無駄であるとの指摘もあった。今後は、インターネット上への掲載などを通して提示することが必要であろう。そのことは、配布の手間が省けたり、情報の迅速な提供が可能となるなどの利点もある。

4番目は、授業計画書の情報と異なった授業の実施について学生からの苦情が多くあった。授業評価などを用いて自己改革に努める必要がある。

5番目は、現在は、授業案内と授業計画（シラバス）を合わせたかたちで情報を提供しているが、教員の教育指標であり、学生への授業外の学習課題の提示でもあるシラバスがどのように活用されているのかを調査する必要があるであろう。

最後に、15回の授業について1回ごとに内容を明示することが必要である。それによって計画的で責任ある授業運営が可能となる。

注1) 『共通教育等科目授業計画書』が発行される以前は、『教養科目講義案内』が出されていた。

注2) 授業案内 (Expanded Course Descriptions) とは

「授業案内」は、提供されている授業科目から自分の学習目的にあった科目を選択・登録するための情報提供の道具である。

アメリカの例を見るならば、学生は学期初めに各学科が作成する授業案内を参考に登録科目を選択する。これは、琉球大学の『共通教育等科目授業計画』と基本的には同じ考えに立脚しているが、アメリカの大学で作成されている「授業案内」は一般教育科目と専門科目の両方を含み、全体としてより懇切丁寧であるように思われる。アメリカの授業案内に含まれる情報をあげると、(ア)科目名、(イ)担当者名、(ウ)日時、(エ)授業内容及び目的、(オ)使用されるテキスト、(カ)評価の基準、試験・レポート等であろう。

ここに例示したモデルは、授業案内としては簡潔な部類に属するものであろうが、アメリカの大学で作成される授業案内は、抽象的な表現をできるだけ排除し、授業で取り上げるテキストが明示され、授業内容も分かりやすく具体的なものになっている。さらに、「評価」に関しても教員の要求するものがはっきりと示されている。

このような授業案内は小冊子(通常はコピーを綴った簡単なもの)として作成され、登録前に学生に学科事務室等で配布される。学生はそれを読み、科目を登録し、講義第1日目に担当教員からシラバスを受取り、学内の書店でテキストを購入し、授業の準備をするということになる(琉球大学大学改革検討委員会『新しい琉球大学を目指して—琉球大学大学改革検討委員会答申—』1993年10月、35～37頁)。

注3) シラバス (syllabus) とは

シラバスは、「授業計画」「教育細目」「教授細目」などと訳されている。簡潔に言えば、それは教員が1学期間(又は1年間)にわたって展開する授業内容のアウトラインを、時間軸にそって具体的に表示したものである。また、シラバスは教員が行う授業の内容だけを示すのではなく、それに対応する学生側の予習文献も明示されているという点で双方向性を有するものであり、教員と学生の双方を拘束する「契約」であるということもできる。

一般的には、シラバスには、(ア)科目番号、科目名、教室、日時、(イ)授業担当者、研究室の所在、電話番号、オフィスアワー、(ウ)教科書、資料、(エ)履修条件、(オ)評価の基準、出席・レポート、中間・期末試験、(カ)授業予定、等の情報が含まれる。オフィスアワーとは、学生が授業時間以外に質問をしたり、論文のテーマなどの相談をしたいときに、研究室で個別指導を受ける時間のことで、教員はその時間は研究室で待機することになっている。「評価の基準」は上述の「授業案内」(Expanded Course Descriptions)に示される場合もあるが、レポートや試験等の最終評価に占める割合などがシラバスの中でも明示されることがある。しかしながら、授業科目の最終目標に到達するための軸になるのは授業内容のアウトラインを時間軸に沿って提示した授業予定であり、それはシラバスに含まれる情報の核になる部分であると言えよう。

シラバスは、通常は授業科目を登録した学生に授業の第1日目に配布・公表され、学習・授業はそれに従って展開されていくことになる。シラバスの作成に当たっては、担当教員は担当科目の最終目標をはっきりと視野に収めながら学習過程を設定することが必要である。そして、その目的を達成するためには、必要な文献・資料等を選択し、効果的に配列することが要求される。さらに、授業を担当する教員は学生に要求する読書量(予習量)についても配慮しなければならない(琉球大学大学改革検討委

員会『新しい琉球大学を目指して－琉球大学大学改革検討委員会答申－』1993年10月、32～35頁）。

4. 生涯学習社会への対応

現代社会に生きる人間は、科学技術の急速な発展に伴って、そのような高度化する社会状況へ適応していくために絶えざる学習が求められている。そのため、「いつでも、どこでも、誰でも」学習可能な社会（生涯学習社会）の構築が叫ばれている。高等教育機関も、生涯学習社会を支える学習機会の提供が求められている。

生涯学習は、大人だけの学習に限定されているものではなく、乳児から、老人まで含まれた広い学習概念である。以下では、大学を舞台とした社会人（職業経験者）の学習活動を中心にみていくこととする。

1) 県民の生涯学習活動の状況

沖縄県を例にとって県民の学習状況を調査した結果をみると^(注1)、調査時点から過去1年の間に生涯学習をした県民は53.6%もいたが、これまでに高等教育機関を利用して学習した経験について質問したところ、公開講座に関しては約4%、科目等履修生制度を利用して学習した人は約1.5%、放送大学や社会人入学制度によって学習した人は約1%のみであった。高等教育機関を利用した学習活動は活発ではないようである。

今後、琉球大学で公開講座が開催された場合利用したいかどうか質問したところ、「利用する」は15.4%、「公民館など、開催場所が近ければ利用する」は52.4%、「利用しない」は32.1%であった。潜在的学習ニーズの高さは感じられた。

どのような理由から「利用しない」と回答したのか質問したところ、「琉球大学が家から離れているから」「仕事が忙しく時間がとれないから」「なんとなく近づけない雰囲気があるから」が主な理由として指摘されていた。

2) 琉球大学における社会人学生の学習機会利用状況と今後の課題

琉球大学で社会人が学習する場合、大学教育センターとの関連では、社会人入学制度を利用しての学習と科目等履修制度を利用しての学習、がありうる。

平成12年度の入学状況を見ると、社会人入学制度を行使している学部は、法文学部と工学部だけで、募集定員も、それぞれ20名と4名だけであった。志願者はそれぞれ25名と1名のみで、決してニーズも高いわけではない。

科目等履修生も、本年度前期は5名、後学期は8名のみであった。

なお、入学者の入学時の年齢を見ると、入学者1687名中年齢23才以上の学生は50名だけであった。

このように、正規の教養教育科目に対する学習ニーズはそれほど高いわけではない。しかし、琉球大学における公開講座受講状況をみると、平成11年度において約1000人の受講生があり、さらに、小中学生を対象とした特別学習事業には250名が参加しているなど、

工夫と努力で学習ニーズを発掘可能であると思われる。共通教育等科目の中には、琉大特色科目やアジアの言語等、社会的ニーズがありそうな科目がありながら、宣伝不足に加えて、時間帯が主に昼間であること、受講料が高額になること、などの障害が教養教育科目に対する学習ニーズの低さの原因になっているものと考えられる。

注1) 琉球大学生涯学習教育研究センター編『沖縄県民の生涯学習ニーズに関するアンケート調査』1998年。

5. 共通教育等と専門教育との連携

1) 現状

各学部における教育理念・目的において共通教育等をどのように位置づけているか、現在どのような問題を感じているか質問した。その結果を以下に示そう。

法文学部 本学部の教育理念・目的、すなわち激変する社会的ニーズに対応できる幅広い高度な知識と能力を持ち、複眼的、多角的視点を有し、国際性および創造性豊かな人材の育成を推進するため、平成9年の学部改組において教育研究分野の総合化と学際化を図り、教養部所属の人文系、社会科学系および外国語系の大部分の教官を受け入れており、共通教育等の重要性を認識し、幅の広い総合的教育を目指している。組織的な対応としては、既設の法政学科と経済学科を総合社会システム学科に統合したのも学際化の方向を示すものである。

教育学部 教員の資質を高め、幅広い教養を身につけるための必要な科目として共通教育等科目を位置づけ、教養領域の自然・社会・人文系列から各々4単位以上、健康運動2単位、総合領域4単位以上、外国語8単位以上の履修を卒業要件としている。

学生は、共通教育等科目を専門教科の基礎あるいは補完的科目として捉えているように思われる。沖縄の地域特性に根ざした研究・教育をするには、琉大特色科目や高学年を対象に開設された共通教育等科目は、その目的を果たす科目群として位置づけられる。

理学部 共通教育等には教官全員で対応する。

共通教育等は、専門分野以外の幅広い教養、知識を身につけ、教養豊かな社会人を養成するという目的があることを認識している。

組織としては自然系科目、専門基礎科目、琉大特色科目を担当している。

共通教育等の大部分の科目は、学生の生き方に関わるものであり、専門科目とも密接に関わり、切り離せるものではない。

高等学校までに培われた知識を基礎にして、共通教育等を通してより幅広い知識を身につけさせる。現在、入学者選抜個別学力試験では理科1科目を課していることが

共通教育等にも支障が出ているという問題を抱えている。高等学校との連携としては理科2科目を課すことが検討課題である。

専門基礎科目では、専門科目を学ぶために必要な基礎的な理科、数学の知識を身につけさせ、幅広い科学知識を理解するための基礎力を身につけさせる。

医学部 医学部の教育理念を追求し、目的を達成するための基礎となるものと共通教育等を位置づけている。

医学専門科目を学ぶための基礎としての専門基礎科目の授業内容が必ずしも目的に合致していないものがあるかもしれない。また、内容が充実しているとは思われないが、専門教育が過密であるため改善が困難である。抜本的なカリキュラム見直しが必要である。

工学部 学問とか技術と言う前に豊かな人間性と幅広い教養を持った社会人であることが要求されることは言を待たない。創造的知識・発想も深く、広くかつ豊かな一般教養があればこそ生まれるものである。

農学部 1～2年次に学部、学科共通の基礎的専門科目を履修させ、本格的な専門科目は各講座に所属した後に行っている。すなわち、4年一貫教育を通して、共通教育等、専門基礎教育、専門教育ができるカリキュラムとなっている。

また、組織的な対応では、指導教官制度により各学科別の各講座の教官及び高学年次によるカリキュラム履修指導を行っている。

なお、本学部における人材育成および応用展開能力の目的を達成するのに広範囲および充実した基礎学力が要求され、これらの点の教育には共通教育等の重要性を強く認識している。

2) 問題点と改善

どの学部も、専門教育と共通教育等との有機的関連性について、その重要性を認識はしているようである。

しかし、その実態は、①教師の側では、幅広い教養を身につけるために共通教育等科目を位置づけてはいるものの、学生の意識としては、単に専門教科の基礎あるいは補完的目としての意識が濃厚であったり、②沖縄の地域特性に根ざした研究・教育をするには、琉大特色科目の履修が望ましいにもかかわらず、現在の枠組みでは活用されていない、③専門教育の基礎としての専門基礎科目の授業内容が必ずしも目的に合致していないにもかかわらず、専門教育が過密であるため改善が困難であり、抜本的なカリキュラム見直しが必要、等の指摘にもあるよう、さらなる改善に努めていくことが求められよう。

6. 選抜試験と教育理念・目的との関連性

1) 現状

選抜試験の在り方が専門教育をはじめとして教育活動に影響している。その問題を、共通教育等レベルでどのように対処しているのだろうか。学部に対して実施したアンケート調査をもとに、その内容を以下に示した。

法文学部 大学の大衆化に伴う学生の多様化が進展し、入学後に専門教育についてこれない学生もみられるようになった。入学試験で、これらの学生をふるいにかけることができないとすれば、専門教育に進む前の共通教育等段階で補完的科目あるいは専門科目への橋渡しの科目の提供の必要性もあるのではと考える。

理学部 入学試験に課せられていない科目、あるいは高等学校で履修していない科目を、入学後に必修とされた場合理解度が極めて悪いケースがあり、少人数で丁寧な授業が要求される

現行では両者の関連性はなくなる方向にある。入試は難しく技術の方向に走っている。共通教育等は本来専門と密接に関連しながらも人間の感受性を豊かにし、広い教養を身につけるものでなければならない。入試制度を改革しなければ、小・中・高校の教育も充実しないであろう。

入学試験の科目数を減らした場合、大学の共通教育等でそれを補う事のできる科目が少なすぎる。特に、文化系にそれが目立つように感じる。現在の共通教育等は、一部の分野（理数系、コンピューター系）を除いて高等学校で履修する科目を全て履修してきていることを前提に構成されていると思える。そのため、入試科目を減らせない一因にもなっている。

教育学部 教育学部の入試は、大学入試センター試験5教科8科目に個別学力検査として、前期・後期日程で主に国語、数学、小論文を中心とした入試となっている。それに加えていくつかの専修・コースでは専門教育に関連した科目や実技を入試に取り入れている。そのような姿から、教師としての専門性の個性化をめざした、総合的な学力と同時に専門教育に関連した学力・適性を加えた選択試験となっている。そのあたりの事情が、共通教育等における履修指定科目につながっていると考えられる。

医学部 特に問題があるとは考えていない。しかし、入学者選抜試験のあり方として、今後は非学術的基準（学力試験以外の基準）の比重を増やす方向で検討したい。

工学部 センター試験及び個別試験で理科の科目数減らしたことが、共通教育等にも、専門教育にも弊害をもたらしている。理科2科目を課す方向で検討中である。

農学部 現行のセンター入試と多様な入試制度の導入によって、入学後の基礎学力にア

ンバランスが生じており、共通教育等のカリキュラム履修指導の面で教育理念・目的の実現が危ぶまれる事態となっている。

他方、少子化の進行を視野に入れて、出来るだけ間口を広げる多様な入試のあり方が望まれ、その際に懸念される学力低下の要因は、共通教育等科目の履修単位数を新教育課程導入（1994年）以前の水準に戻して、かつ科目内容をきちんとした学問的なものにし、なお不十分な面はリメディアル教育制を導入して対応する改善案がある。

2) 問題点と改善方法

現在は、選抜入試によって選抜された学生の質と、教育活動を行っていく上で望まれる学生の資質とに差があり、その差を補うために教養教育科目を利用しようとする傾向が見受けられる。確かに、本学の理念・目的に沿って、質の高い学生を選抜する方法を見いだしていくことは大切であるが、今後、18歳人口がますます減少してことを考えていけば、選抜された学生の質を教育活動を通して、いかに高めていくかという教育内容・方法の改善の方が現実的であろう。

不確定の時代には、多様な観点から学生を選抜し、きめ細かい教育を行っていくことが大切であると思われる。